# YKK 64ビル

# YKK 64 Building

# Street façade and courtyard formed by 'thick walls'

所在地：富山県黒部市

用途：事務所

構造設計：TIS&PARTNERS

# 設備設計：総合設備計画

構造規模：RC柱梁構造2階建

敷地面積：2276.957

建築面積：638.26

延べ床面積：972.71

施工：平井工業

竣工：1999.3

写真：北嶋俊治

習作／窓

２０世紀は、個を最大化し、それを集積することで全体も最大化するという原理が貫徹した時代だった。しかし、この原理は無限な活動フィールドがあって初めて成立するのだが、現実は有限だから、このままではやがて立ち行かなくなることは明らかである、ということに最近気付いた。景観問題も、環境問題も「個の最大化」原理が行き詰まった実例といえる。この建物で、私は２１世紀のこの二つの問題に対する解決策の提案を試みた、というと少し大袈裟なのだが、具体的に表現すると、ひとつは、建物の外形ではなく窓あるいはもっと広くいえば、開口部の輪郭で建物の個性を作るデザインを試みたこと、もう一つは、この地が豊富な地下水に恵まれていることを利用した省エネルギー技術を試してみた。

オブジェクトの輪郭

第１のテーマとしてあげた景観問題あるいは開口部の輪郭のデザインと、「個の最大化」の原理とがいったいどう関連するのかについては説明を要するので、既に別の場所に書いたことではあるが、ここで改めて述べておこう。

建築家に、建築の外観で一番大切な形態要素は何かと問えば、多くの建築家は建物のプロファイルとかボリュームと答えるのではないだろうか。つまり、建築の抽象的な外形、あるいはもっと即物的に言えば建築の「輪郭」にこそ建築作品の個性が現れるということである。近代建築が輪郭の建築であることは、それまでの歴史にはついぞ建築として作られたことのないような不可思議な輪郭をもった建築が、近代建築の時代になってから豊富に生み出されたことを見ればただちに了解できよう。広々した空間に、ぽつんと置かれた独創的な彫刻形態こそ近代建築の真骨頂である。これはサボワ邸からビルバオのグッゲンハイムまで変わらない特徴である。しかし、このような建築が都市空間のなかに建てられると、やたらに自己主張し、「建築」だけが妙に強調されてしまう。ヨーロッパの都市の旧市街地のように近代建築が相対的に少ないところでは、「異化作用」として評価できるかもしれない。ところが日本や東南アジアの都市のように都市全体が近代建築で覆われているところでは、全ての建物がめいめいに主張するせいで、おもちゃ箱をひっくり返したような景観になってしまう。街区であるとか地区という集合の物的表現は個々の建築の主張の背後に隠れてしまう。つまり、これらの都市では、個々の形態における最大化は全体の最大化に繋がらないのであるが、これは、個々の建築の質が悪いのではなく、全体のシステムの問題である。

このような不具合（と感ずればの話であるが）に対して、野放図な個性の表現はけしからんから、抑制されるべきであり、景観条令等で公的に規制すべきだと主調されることが多い。このような主張は大衆的な支持を得るのだが、輪郭線を規制したところで、その先で、どのような町並みに誘導すべきかという段になると、皆を説得できるようなイメージを語れる人は現代ではどこにもいないから結局行き詰まってしまう。

内なる輪郭としての開口

この行き詰まりの原因は、建築家の我が儘や、非力、あるいは時代の趣味の問題にあるのだろうか。そうかもしれないがそれだけではないかもしれない。むしろ、建築全体の輪郭をどうすべきかという議論をしていること自体に限界がある、と考えてみてはどうだろうか。どんな建物も、自分の輪郭を自由にしていいんだということは幻想かもしれない、と考えてはどうだろうか。

実際、建込んだ都市のなかでは、そもそも建物の輪郭線は自由にならないはずである。限られた土地に建物を目一杯建てようとすれば、自ずから建物の輪郭線は隣地境界線と都市計画規制で決ってしまうはずである。では、そういう状況では、都市の建物が個性を発揮する事はできないかというと、そんなことはない。一つの可能性は開口にある。開口の形にだって建築家の独創性は発揮できる。そのことを雄弁に語っているのがルネッサンスのパラッオのファサードであり、コルビジェの「蜂の巣住宅」であり、ドミニクペローのフランス国立図書館である。フランス国立図書館は物としてみると塔状の建物の形も表層もオフィスのような匿名性に覆われている。ところが最大の開口である中庭には赤松の林があり極めて独創的で個性的な空間体として、この建物の性格を決めている。理論的に考えて見ても、開口も実は建築の形を浮かび上がらせている輪郭の一種であることがわかる。違いは外の輪郭に対して、内側から形を決めているという違いだけである、これは相対的な差である。

既に述べたように、近代建築は外側の輪郭は豊にしたが、内側の輪郭についてはどうであろうか。近世以前の建築ではどこの文化圏であっても窓周りが豊かに装飾されていたのだが、近代建築になると、ポストモダンであろうが、レイトモダンであろうが、結局は金属製のサッシ一つで開閉される単なる装置になってしましっている。

何の事はない、デザイン的な力点からすれば外側の輪郭と内側の輪郭がトレードオフされているだけである。だとすれば、建築の造形の戦場が再び内側の輪郭に移るということがあれば、現代の建築家が内側の輪郭に示す無関心と以上の関心は外側の輪郭に期待されない。そして、都市景観の問題に対してもまた違った展開が可能になるのではないか、ということを考えているのである。それがこの建ての物第一のテーマであり、その可能性を試す習作である。

スクリーンとしての壁

この建物はＹＫＫの主力工場である黒部事業所の正門に向かう幅員１１ｍの新設都市計画道路に面しているので、それ相応の大きなスケールの構えが必要であるし、サービス系の商業施設のテナントビルとしての店構えも要請されよう。ところが、熱負荷を減らす為に必要最小限の単純な開口があれば良い。このギャップを埋める為に、道路側に一枚の壁を建てた。これがこの計画のスタートである。この壁をスクリーンに見立てて、それに向かって、建物の内部の活動やイメージ、メッセージが投影される事を想定する。それらは歪み、形と機能が強調され、動きや情報性が誇張され、時には部屋の一部が伸びてゆく。ストリートに向かって都市的に加工された情報が変形され、投影される。

クールチューブシステム

一方、建物に必要な新鮮空気は、この壁の妻面から取り入れら、炭で脱臭され、（夏は）冷水ラジェーターで除湿され、地中の地下水層に埋められた塩ビ管で（夏は）冷やされ、（冬は）暖められて室内に送り込まれる。だから、これは、装置化された換気窓でもある。さて、このシステムは、クールチューブと呼ばれる自然エネルギー利用の方法である。エネルギー源として地熱と地下水を利用する方法があるが、黒部市は黒部川の伏流水が浅く流れるので、効率の良い地下水利用が安価にできる。年間を通して１５度前後に安定しており、この敷地でも地下６０ｃｍのところに豊富な地下水脈に当たった。直径○ｍｍの塩ビ管４本が埋設されている。これで、今夏、外気温３２度の時に、室内で約２７度に降下しており、外気負荷（外気負荷の比率は？）は殆どゼロになっているといってよい。これは投資効率で略算すると、３０年償還で約○％ということになる。勿論、この方法も、野放図に行えば、やがて黒部市の地下水温度を引き上げ（冬：下げ）、外部にツケを回すだけとなる。だから、そもそもの消費エネルギーを減らすことを考えなければならないのだが、ここではオーソドックスかつ通常のテナントビルの予算でできることとして、窓を小さくかつ二重ガラスにして、外壁の断熱を厚く、屋根は屋上断熱するという方法を取っている。

全体の有限性を意識した時の建築の姿を探る習作である。（約３，500字）